



～ 第12回パッションフルーツ品評会の審査講評～

6月10日に「第12回パッションフルーツ品評会(JA東京島しょ小笠原父島支店主催)」が開催されました。審査は村役場産業観光課および小笠原支庁産業課(農業センター含む)の職員で行いました。出品は出荷箱部門のみで、父島から1点、母島から6点の合計7点でした。果実の色合い、つや、大きさ等の揃い、病害虫の有無等の商品性を総合的に評価しました。

今年のパッションフルーツの出来ばえは、電照をかけた促成栽培では1月から2月の冷え込みにより開花が遅れた圃場もありましたが、その後順調に生育し、豊作となりました。露地栽培では4月から5月にかけて曇天が多く日照が不足しがちでした。また、一部で病害の発生もみられましたが、適切な管理により高品質な果実が収穫されています。

入賞した三点は何れも甲乙つけがたい良品でしたが、中でも金賞に入賞した福田農園は充実した果実で揃いも良く、着色も良好なものでした。また、惜しくも入賞を逃しましたが、父島からの出品物についても気象条件の異なる中、優良なものが出品され高い評価

<審査結果>

金賞 小笠原村長賞 母島 福田 農園
銀賞 小笠原支庁長賞 母島 小松 農園
銅賞 島しょ農協組合長賞 母島 藤谷 農園

を受けました。年々、栽培技術および荷姿が向上し、出品物の差がなくなっています。この品評会が、個々の生産者が技術を再確認し、地域全体のレベルを高め、小笠原パッションフルーツのブランドとして向上する良い機会となっていると感じています。



写真1 金賞 福田農園の出品物

審査委員長である農業センター所長から、父島返還祭において審査結果および講評を壇上で報告いたしました。 <網野>

農業者セミナーのお知らせ

意欲ある農業者を対象とした農業者セミナーを8月10日(金)より開講します。

スケジュールは以下のとおりです。9月以降の開催日は前月の開催時に告知します。

8月 マンゴーの剪定 9月 冬野菜の栽培 10月 農業の経営 11月 かんきつの剪定・取り木
12月 自生植物の繁殖 1月 畜産と堆肥 2月 病害虫管理 (全7回)

希望者は、8月7日(火)までに農業センター(担当:網野)へ電話 or FAX で申し込んで下さい。

～「重要病害虫発生時対応基本指針」が制定されました～

小笠原諸島には、かつてミカンコミバエが分布し(1984年に東京都などにより根絶)、現在でもアフリカマイマイなどが分布するほか、毎年のように新たな病害虫が侵入・発生しています(ニュースNo. 87参照)。また、最近では都内(本土)でもPPV(プラムポックスウイルス)といった、国内未侵入の病害虫の侵入・発生が確認され、多大な損害が生じ、多大な労力が払われています。そのほか、チチュウカイミバエや、リンゴやナシの火傷病などの国内に未発生の病害虫が国内に侵入した場合や、アフリカマイマイやアリモドキゾウムシなどの国内の一部地域(小笠原諸島など)のみに発生している病害虫が新たな地域に侵入した場合には、農作物などの有用な植物に甚大な被害を与えるおそれがあります。

そのため、農林水産省では、このような国内にまん延すると有用な植物に重大な被害を与えるおそれがある病害虫(「重要病害虫」といいます)が発見された場合、関係機関(国や都道府県など)が連携し、植物防疫法に基づきこれを駆除し、まん延を防止するために必要な措置を迅速かつ的確に実施できるよう、先日(2012年5月17日付)、「重要病害虫発生時対応基本指針」を定め、万が一に備えることになっています。

概要は以下の通りです。

1. 対象とする重要病害虫

植物防疫法施行規則において規定している検疫有害動植物(ポジティブリスト)や、暫定的な検疫対象として告示で規定している有害動植物のうち国内未発生の有害動植物など。

2. 発生に備えた事前の準備

連絡体制の構築、要員の確保、情報の収集・共有、同定・防除技術等の向上。

3. 重要病害虫の発見・報告

侵入警戒調査等の実施、発見された有害動植物の同定、発見の報告。

4. 初動対応

発生状況等の調査、初動防除の実施、リスク分析。

5. 防除対策の決定・実施

対策検討会議の開催、防除の実施、発生の公表・報告。

生産ほ場などで見慣れない植物の病気や害虫を見かけた方は、躊躇することなく農業センターに連絡をお願いします。 <大林>

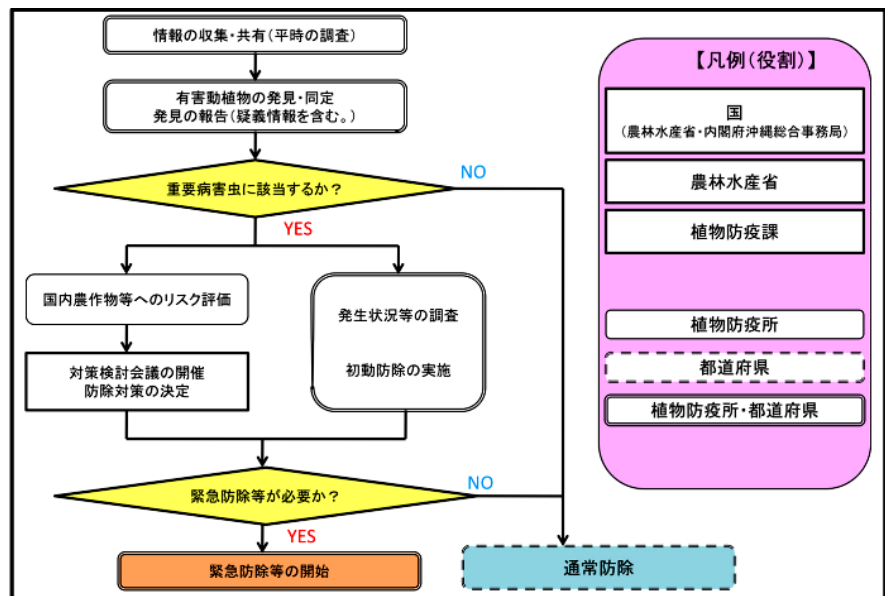


図1 重要病害虫発生時対応基本指針に定める関係機関の行動内容(流れ図)

～ジャボチカバの栽培特性がわかってきました～

●ジャボチカバとは？

ブラジル原産のフトモモ科の植物で幹に直接、果実がなることから「キブドウ」とも呼ばれています（写真2、3）。日本では沖縄県と静岡県で商業栽培されていますが、国内での栽培研究事例は極めて少なく、生育・果実特性は明らかになっていません。四季なり性のため観光農園に向いており、パッションフルーツやマンゴーの主力農産物の端境期にも出荷が期待でき、加工品としても利用できる有望な熱帯果樹として農業センターでは6年前から研究を始めました。



写真2 ジャボチカバの樹形と試験圃（鉄骨ハウス）



写真3 ジャボチカバの花と果実

●6年間の研究でわかったこと

2000年に大葉系苗木を購入、2004年に定植した樹では2006年に初結実しました。平均収量は2010年に最大の11.5 kg/となりましたが、この3年間は10kg/樹程

度で安定しています（表1）。樹の成熟にもなう果重、糖度、酸度の経年変化は今のところみられていません。

表1 大葉系ジャボチカバの果実特性※

年	収量 (kg/樹)	果重 (g)	糖度 (Brix%)	酸度 (mg/100ml)
2009	10.2	5.4	16.2	0.41
2010	11.5	5.2	16.4	0.44
2011	10.2	4.9	16.0	0.35

※5樹の年平均値

小さな収穫ピークを含めると収穫期は年間7～9回です（図2）。大きな収穫ピークは春と冬にみられ、その時期は果重も大きくなる傾向がみられます。収穫サイクル（発蕾から完熟まで）は夏季で25.5日、冬季で46.8日でした。病害虫等についてはカイガラムシ類とアブラムシ類の発生がみられ、ネズミとメジロの食害があります。

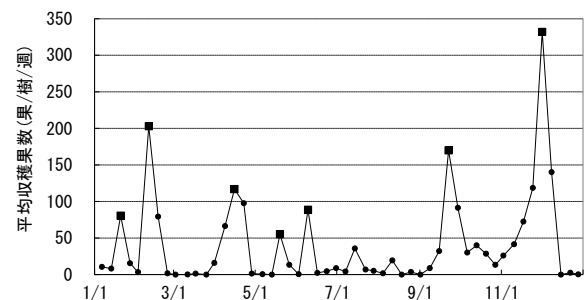


図2 2011年の大葉系ジャボチカバの収穫果数の推移

●今後の課題

①現在は主幹1本仕立てですが、多幹仕立てや生垣仕立てなどの方法では？②常に開花・結実を繰り返しているため、農薬散布の時期の検討や登録農薬を使った薬効薬害があるのか？③果実の日持ち性が悪いため、貯蔵条件は？④露地栽培での風雨による影響は？等が課題としてあります。

また、苗木の増殖試験の研究結果次第では、来年度に苗木の有償配布を検討しています。

< 宗 >

～ 視察報告 国産バニラビーンズの生産・販売企業を訪問～

農業センターでは小笠原の新たな特産農産物の開発を目指して、バニラの試験栽培を行っています。国内での生産・販売事例の情報収集のため、福岡県で国産バニラビーンズの加工・販売を行っている（有）金子植物苑を視察したのでご紹介します。

●バニラビーンズについて

食品などの香料として広く用いられるバニラビーンズは、ラン科の植物であるバニラ（*Vanilla planifolia*）の果実を加工・熟成（キュアリング）して作られます。国内で流通しているバニラビーンズのほとんどは外国産のもので、世界の生産量トップ3はインドネシア、マダガスカル、中国です（2009年）。バニラビーンズの等級は主に長さによって決められており、等級が高いものほど価格も高価になります。基準は生産地や販売業者によって異なりますが、上級のものでは通常20cm以上の長さが必要とされます。

表2 バニラビーンズの等級基準の一例^{a)}

等級	長さ
A	20cm以上
B	18～19cm
C	15～17cm

a) インドネシア産バニラビーンズでの例
<http://indonesianorganicvanillabeans.com/>より引用

●金子植物苑の取り組み

金子植物苑では、福岡県内を中心として、提携する国内の農家にバニラの種苗や独自の栽培マニュアルを提供しています。栽培は、主に遮光や冬期の加温のために、施設内で行われています。農家が生産した果実は金子植物苑が買い取り、キュアリングを行います。キュアリングの方法について、同社は特許を

出願しています。生産されたバニラビーンズは地元のアイスクリーム店をはじめ、ケーキ屋や製菓店などに販売、利用されています。

価格の安い外国産品と競うには、大きさや香りなどの品質を高め、有機栽培による付加価値をつける等の差別化を図る必要があります。そのため、最上級のビーンズの生産を目的として、提携する農家が収益を得られるようにしている、とのことでした。

●小笠原でのバニラ栽培の課題

小笠原で経済的なバニラ栽培を成功させるためには、栽培技術の確立、キュアリング技術の確立、販売方法の検討、が必要とのこと意見をいただきました。



写真4 バニラの結実状況（農業センター）

栽培面では、熱帯地域原産のバニラを、亜熱帯地域でも効率的に生産する技術の確立が必要です。販売面では、小笠原で作られているコーヒーやラム酒、カカオなどの嗜好品にバニラの香りをつけることによって、魅力を高められるため潜在的な需要は高いと考えられます。また、花の観賞や受粉を体験できる観光農園といった利用方法もあります。農業センターでは現在、小笠原での栽培技術の確立に向け、遮光条件や葉果比など、栽培条件の解明に取り組んでいます。 <窪田>

農業センターニュースは小笠原亜熱帯農業センターのホームページにも掲載しております。

検索

小笠原支庁 → 小笠原亜熱帯農業センター → 農業センターニュース